

八・布に描かれた城 -着物・帯・型紙・幟・藍染-

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

骨董市には着物の専門店がいくつも出展され、絵柄が古地図や城である物を集めている。これまで江戸大絵図の留袖や、多くの城着物グッズを見つけた。市場には縮緬や大島紬、金蘭の帯等精緻な細密な構図のものもあり、多くの愛好家でにぎわっているが、高額なものを見つけていただいても、着物の価値はわからない。そういった中で魅了されたのは男の美学ともいべき羽裏である。羽裏、羽織の裏生地、着姿、つまり、正面、背面からは見えない。脱いで初めてわかる遊び心をくすぐるものである。江戸時代、派手なものでたちが禁止され、見えない裏地のおしゃれが粋とされ、現代に引き継がれている。豊かな染色技術や細密な刺繍によって施された全国の城の姿がそこに再現されている。絢爛豪華な帯の数々にも魅了される。先日骨董市で洛中洛外図屏風を5本の帯に仕立てたものに、二条城天守を見つけた。考えているうちに品切れとなり、一期一会の無念さを味わった。骨董市場にある魅力は大量生産ではなく、オンリーワンに近いもの、滅び去る絶滅危惧種の生物の様なもの。



羽裏に描かれた岡山城



羽裏に描かれた江戸城



羽裏に描かれた姫路城

着物芸術として、手書きのものや刺繍もあるが、染色技術技法の一種に孔版印刷である江戸小紋の型紙がある。和紙を柿渋で貼り合わせ、彫刻刀で絵柄を彫り、紗を張り付けて補強する。細かい文様が刻まれ、美しい着物の絵柄として再現されるが、今では光を透したシルエットが美しく、調度品等にも加工されている。殆どは小紋といわれる細密な絵柄だが、明治以降にはキャラクターや斬新なデザインも登場し美術品として十分に楽しめる。伊勢型紙が有名で、現在も重要無形文化財として保存伝承されている。戦前までのタオル等

の印刷版としても活用され、繊細さはないが実用的な面白い型紙として城等の絵柄も残されている。

染色技術で城と言えば、手染めの幟が挙げられる。風林火山等、今もミニチュアのものがみやげ店に並ぶが、戦国時代以来の軍用幟は幅76cm、高さ3.6mと大きい。手持ちの最大のものは太閤秀吉絵柄の一对で、一つが92cm×6mに及ぶ。薄い生地に片面染めで両面から読み取れるが、片面は反転画像になる。今は相撲部屋や広告に使用されるが、屋外では災害時の危険もあり、殆ど見られることはなくなった。嬉しいことに城の天守が描かれるものが数多く見られる。加藤清正の虎退治等勇壮なものが多いのは、鯉幟のように子供の成長を願ったものか。戦国時代多くの合戦で兵の所在を現したが、時には兵の駐屯を幟で偽装し、敵を欺くために使われた。川中島妻女山の上杉勢等戦記や合戦屏風に描かれている。

染色技術で忘れられないのが、藍染めである。阿波の藍染が有名であるが、各地で生産されている。骨董市でも三層櫓を染めた作品をよく見ることができる。シンプルイズベスト、単色美、錦絵の藍刷と同じ感性が見られる。手元にも藍染無形文化財秘蔵東海道五十三次があり、色止めした白の絵柄と表裏共藍に染められている。当然、豊橋、岡崎に城の景観が描かれている。

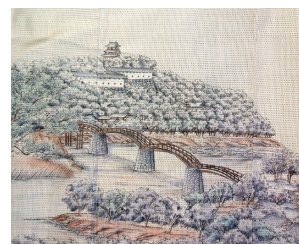
染色技術として城を見てきたが、ここでは羽裏の城、着物の城、帯の城を写真にて紹介したい。



金蘭の帯、洛中洛外図
二条城天守



黒留袖の金沢城石川門



大島紬の岩国城と錦帯橋

さいじょうさん

染色技術として城を見てきたが、ここでは羽裏の城、着物の城、帯の城を写真にて紹介したい。

染色技術として城を見てきたが、ここでは羽裏の城、着物の城、帯の城を写真にて紹介したい。